近聞雜録　完

和書門
類
一八八三七號
一八一函
七架
一冊
326

内閣文庫
和書
類
一八八三七號
二二二函
四架
一冊

随筆
七ノ一

内閣文庫			
番號	和	18837	
冊數	3	(3)	
函號	212	224	

近聞雜録

篁墩野史吉漢宦著

白石先生新安手簡の一條の説に清朝康熙年の頃元朝乃子孫西韃靼にて夥しきことに成居られし康熙帝より歳幣の料に銅三千斤を送られしは本朝より交易して来る處の銅ハ此為なりといへり今案するにこれ長崎へ来る唐舶乃商長等か口傳を載られし處なり其實ハさる事ハなくして本朝より渡さるゝ銅ハことごとく錢幣を鑄らるゝ為の用なるを彼舶人等我本國の錢幣に全く

本朝の銅を須て成ることを諱て托言してかくハ云ひしなるへし元朝の後西韃靼にて亡しるハ清の太宗の時にあり（清の太宗ハ太祖より二代目なり太祖名哈赤といふ明萬暦の末に僅百五十人にて軍を起し鳳凰山に旗を立撫順城を乗取次第に勢振しかハ明朝より討手楊鎬劉綎杜松李如栢を大将として數萬乃軍兵を向けられしか皆一戦に打破られ劉綎杜松ハ討死し楊鎬李如栢ハ逃帰り獄に下されて死せしかハ亦是を遼東城にて攻取まて天啓五年に太祖哈赤ハ死せしなり是よりの軍にハ西韃靼の蒙古の兵を加勢にたのミ軍せしなり所謂元の末裔なりしか今に二代目太宗の時に元乃裔孫國を失ひしハ下に見ゆ）王士禎か居易録に云察児罕國元之嫡派也世雄西北諸部傳至靈丹可汗在位久忽欲往西域歸佛教其台吉那顔等苦諫不聽國中無主太宗皇帝因發兵追降之其尚璽近侍以傳國璽倉卒坎地而霾之兵既退有童豎牧羊其地一羊屢至坎所跼之不已驅之復来牧覺有異試發土則璽見焉聞於官遂進上時天聰某年也今蔵御府と見へたりこれまて康熙の時元の裔國を失ひて既に久しけれとも猶遺孽ありしも清朝と抗して歳幣を受るに至りし又池北偶談幸魯盛典乾隆文集をミるへし考るに西北の部落に叛者あり（名を噶爾丹といふ）て兵を用ひ康熙雍正乾隆三代を歴て餘類まて蕩平し西方盡く版圖に入り其地を拓くこと二萬里に

ゐまつり乾隆御製集にかけて元商の事歳幣の
ことなかりし彼國の銭幣 本朝の銅をもちて
鋳られしは 居易録存硯樓集沈徳潜文集に載
せり今次才に出して考に備ふ 居易録云近自
洋銅不至（洋銅とは日本の銅なり日本をさして東洋といふ日本銅を洋銅といひ日本扇を洋扇といひ日本の夏菊を洋菊といふ）各布政司皆停鼓鋳銭日益貴銀日
益賤今歳屡経條奏九卿雜議究無良策即毎銀
一兩抵銭一千之令戸部再三申飭亦不能行官
民皆病と見えたりこれ 本朝乃銅至らずしては
鋳銭なることあたはされ銭日に乏しくして踴貴し 銀

價低くして両貨の價お敵せず 此王士禎は康熙
の人なれは洋銅不至といはしは 昭廟の御時猶銅を
縮減せられし時の事なるへしされは今 本朝の
銅を以て國幣乃本とする事は尤以て國の機
密なれは我邦にて問ふにかく事を構へて益く
多くあり然らずんは西韃に歳幣を送るは國恥なり
なきを隠さるゝ人ぞ國恥に托せて我 邦の人信
して其内實を知らしめさる謀にしてかねて彼國辨
銅の長官より商人に言教へ置けるなるへし近来我
邦乃産銅漸く饒ならさるによりて次才に 縮減

せられしぬれハ彼國も殊ニ錢幣の源ニ窮したりと
見えし沈德潜集范毓䭴碑ニ云乾隆三年八月
疊奉辨銅之命而辨銅之役故難銅產倭地開采
歳久其源漸乏倭以銅少居奇狡獪百出又海船
出沒風濤中率兩歳始返而西安保定湖北江西
江蘇五省分運鼓鑄須銅甚急公既老之年力承
茲役冀上勿負朝廷之恩下勿滋子孫之累心力
交瘁病致不起とみえたり二書のいふ所によれバ
清國凡そ右省の鑄局ミな和銅を以て其用ニ給せ
宜なり我　邦乃銅縮減せられしぬれハ乾隆の初京
師錢貴くして康熙帝の造りおかれたる銅字乃
活版をだニ消爍して錢ニ鑄られりと乾隆帝の作
文ニも見えたれバ其窮蹙思計るべし　さて世人の
說ニ唐商和銅を持還りて煎煉して黄金白銀
を搾取るなどいへりいはれなき妄言なり既ニ
居易錄ニ銀低くして錢貴しと見えたり何ぞ工力
ほど費してかゝ抄の黄白を煉取せんや況や當時清
國黄金を貨幣とせざれバもとより貴重すべきと
いへるにもたゞ服玩の用のミなれバ器飾不急の黄金
國用貨幣の銅と交易するをバ望む所なれたゞ寶

暦の中頃より彼國の金銀を募られしに交趾雲南西蔵の足色の生金銀を數千斤載来りて銅を交易せり又是よりさき　本邦の金幣を倭金といひて持来り銅に替ふる事幾年なり但我國の金幣ハいづくの地いかなる所よりか漏れて彼國へハ往しか未審しきことなりかくのごとくなれハ金銀ハ不急なるを以て賤く銅ハ國家必用の急なるを以て貴ぶ所となし上にいふし和銅をはじめて鑄錢の用本とせる事今に存りて諸書の載せる所顯然たりされど白石氏の頃まではいまだ其書とも渡り来らされハ達識の人といへどもただ口傳の說によりて援られしこと

誤しなるべし

常藩府邸の後樂園に一樹あり皮滑にして極て赤色紫荊樹（百日紅）紫薇花也宋の陸務觀か老学菴筆記に唐行持か詩に紫荊樹と作れり今是に據か花史花鏡等に紫荊樹と云ハ今の蘇枋（すはう）花なりに似て聳直なり葉ハ欅（けやき）又ハ楡（にれ）に似たり五月の初に花を著く圖如左

白瓣黄蕋

其後考ふるにこれハ藝苑にいふ沙羅雙樹といふものゝ小花なるものにてなる由此種ハ花小大小ありといふこと也

園吏これを赤栴檀樹といふ中村國香か房總志料に上總長柄郡大山寺の石階の下に一樹あり土人から本ともふ樹皮滑かにして紫微花に似て中心白色葉ハ小槲樹にありて四季に花を着け黒實を結ふ花形ハ聞漏きりといふもの是樹とよく相似たり一本あるや否猶考へし

武蔵府中乃高安寺に足利直義の寄られたる袈裟一頂あり裏に寄附の趣住僧の名并に名衒花押（カン カキハン）ありて従三位源直義とあるを直義ハ三位に叙せられたる事未考余嚮に一観せしか匆略全文を寫さす及

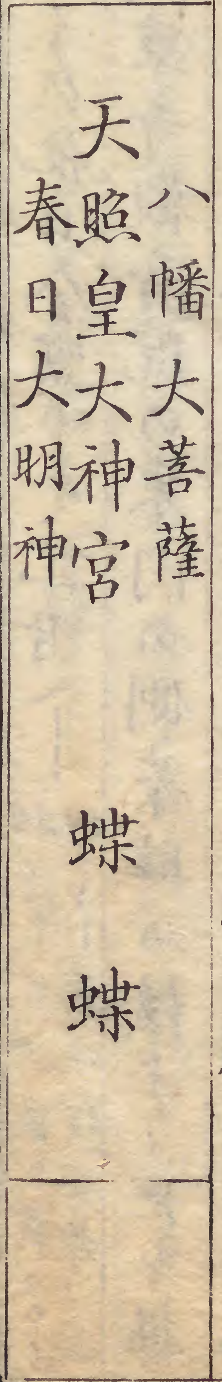
これ他日全寫して記附へし（押字ハ花押藪に載る所と同しと見ゆ猶可考）

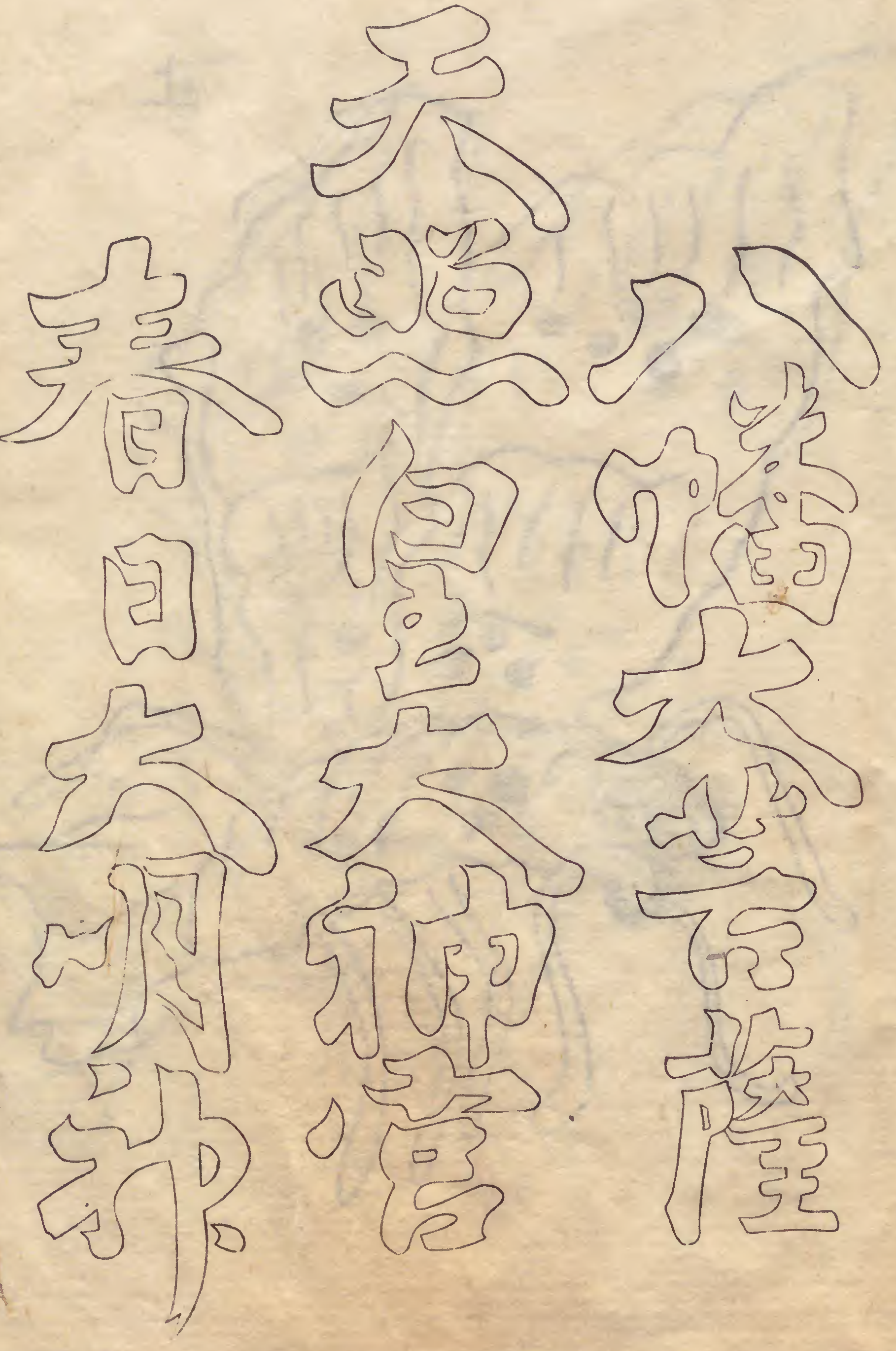
淺草寺觀音院の東門の側茶肆の後より地を掘りて古石幢を出せり寛政四年正月の末の事也門人山田直詩其碑を乞得来て視せ幢面に光明真言を梵書にて記し中一行に

貞治二年乙巳八月時正 禪智 禪尼 逆兒

と誌せり四百餘年のものなり時正ハ春秋の彼岸をいふ佛書に出たりといふ徒然草にも見ゆ逆修を逆に作る古き字體なり歐陽率更の皇甫府君

碑にもありとて光明真言を梵字にあらはしめ
唱しめ人逆咒といへるも今の俗壽蔵を営むを
逆修といふ其頃はかくも書るにや未審
志摩國五智村居民某家蔵平家赤旗長廿一丈餘
幅一尺弐寸餘地練絹（子リキヌ）繒に作る にて朱を以て染其色今
なほかはらで燃三神の文字ありぬきの白。蝶を墨
繪にて羽の中隈とりあり寛政辛亥の秋 幕府の
台覧に備へしに其圖如左　右亀田興鵬居よりうつし来





上

下

枇蘭樹といふもの伊豆の國熱海伊豆権現乃祠中に大樹ありし故友山岡氏俊明 新井貞堅かたりき江戸の藝圃にあるものとハ異なりといふ東都滌井乃地藤堂家の別墅にも一樹あり數年前其木枯失たり其孫枝を得たる人三十餘年を經て今茲寛政四年四月初めて花を著たり其族門人石塚公簡一枝を携へ示す下に圖を公簡云枇蘭樹藝圃に盆に小植たる小樹なりしが真種にあらず野州二荒山より出たる種にてこれを日光枇蘭樹といふを熱海の樹も近来風に吹倒されて今ハなしと聞く東都乃地方にてハ染井の孫枝たゞ一樹のミなりといふ

佛經に毘羅樹又ハ毘蘭樹又ハ毘嵐にも作る譯して大沙羅樹といふよし屋代弘賢いへり

壹貳參肆伍陸漆捌玖拾の字參を叁にして作る宋版の書には登にも作る甲州にある宋の淳熙の銅鐫乃銘にも叁の字に作る徂徠集に見ゆ漆を柒にも作る捌この十字明の初め開済が作りて伝はりしといへり宋の三山志に載せたれど宋朝より来ある字なりとぞ書影に見ゆ今按ずるに宋朝とせし始まるにもあらで唐張参が五経文字に此字を用ゐられば唐朝既に有りしなり猶其より前にもあらんなる猶考ふべし

龍眼樹は大隅國にあり中國にても閩廣にあれ

よの世人暖地ニ生ずるものなれバ先年信州
松本の山中ニ一大樹ありて実を著ること夥し
初めハ村童此食ニ充しが後領主乃聴ニ達し
龍眼果なるを知り人役をもて其樹を護せしむ
人徒等其役を厭ひ竊ニ鹽水を其根ニ灑ひて
遂ニ枯死せしむといへり越後國生瀉此一寺ニも
一樹あり生来二十餘年を経て始て十餘顆を
著けりと余が族人の年老なりき今ハ猶高大ニし
てありぬ蓋しさあれバいづれの地ニても生ひ付
ぬれども実を著ぬなり甚しく寒を畏る木ゆ

皆たゞめ小樹のうちのことなり長大ニ成ぬれバ
其性既ニ粗且堅剛ニして寒ニ堪る事常
のことなり蜀乃成都ニ木槿一株ありて石上ニ
生ず其疥癬を治る事妙なり所謂川槿の真種
なり人其皮を求るものゝ多きを厭ひて縣令某
熱湯を根ニ澆ひて枯をしむといへり王士禎が隴
蜀餘聞ニ記せり信乃龍眼樹と同日の談なり又
今の人龍眼核を種ゆるものを見るニ多く枇杷を
生ず南橋北枳の類とみゆ豆州三島驛の
寺ニ一株あり葉槲ニ似て光澤長大なりといふ

實を著も信州松本のものハ葉木槵子に似て厚かりしといふ大隅の産のものハ木槵子の葉に似たりといへり

左傳隠公三年の杜注に忽公知而故問責窮辭とあるを陸貞山か左傳附注傳遜か辨誤等にいへぬ注也といふハこれを讀やうあしきゆへなり忽公ノ知而故問責窮辭ニとよむへし一段としてゆへ窮辭ハ孟子の字あり

左傳六順六逆の事管子にも見ゆ左傳へ書入考合すへし

古金幣の圖　人あり此圖をおくるまゝ示出を

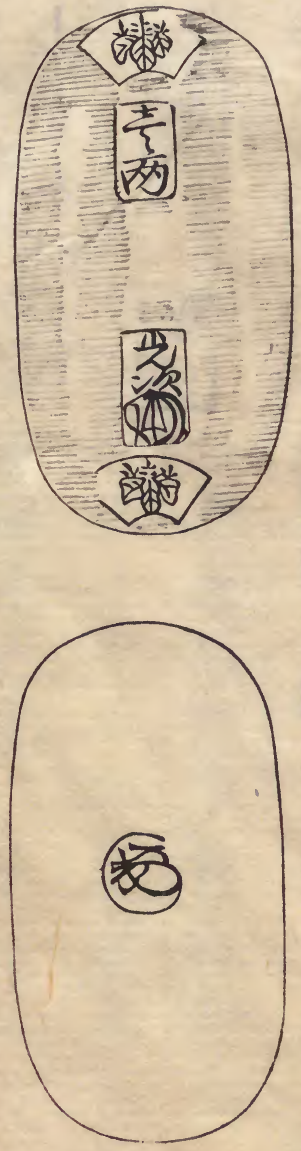
天正大判金　重四十四匁七分

武蔵小判金 重四匁七分六厘

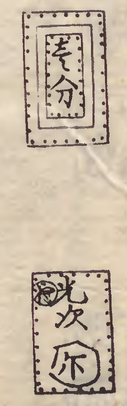
同上

駿河小判金 重四匁七分六厘

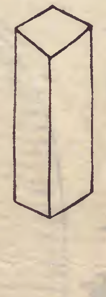
德乗小判金 重四匁五分



同上壹分判金



往古棹金切遺ニ用切端の圖



右青木敦書の金銀圖譜ニ載せしや其異同考
ふへきものあらされハ附載するのミ墨判といへる
錢量押字ある墨書あるものゝ名なりとそ後藤
庄三郎か家の詞なりとそ

寛政四年五月十九日躋壽館薬品の會集に余
ひらん樹の枝をもちて携へ出る醫官福井某云
京師の方言にくわくりんといふ醍醐寺に一樹
あるのミなりといふ
同日ニ大隅の産なりとて曽煥卿余ニ龍眼二顆を
おくる漢華産ニ比すれハ実小さけれと殻稍厚く
皺紋あらしたり是自然生の物へなるへし周亮工か
閩小紀ニ云閩會二十里東南隅多龍眼樹樹三接
者為頂圓核之初種經十五年始實實甚小俗呼
為胡梆眼覓善接者鋸木之半去大實之幼枝接

之至四五年又鋸其半接如前若此者三數次其實滿溢倍于常種若一二接即止者形小味薄不足尚也三接者曰針樹未接名野箆といふと見ゆ

按するに薩州より龍眼を献上ありしを寛明日記にしるす其比よりのことなり

寒蘭といふ冬末春初に花を著る蘭あり種琉球より来るといふ花に青紫の二色あり葉常種より狭細なるを又蜂蘭といふもあれ是まゝ冬に至り花さく是も琉種なりと二品片山誠之盆栽して賞せ大坂の花肆まて購ひ得たりといふ

浮種の蛇林子はやぶせりといふ草の実なり 今道傍にやぶしらみといふ草の実うるあるも是ハ鶴蝨と一類二種あり鶴蝨もやぶにんじんといふ草の実なり此鶴蝨ハ薬性纂要に出たり天名精の実なるをあげたり二草ともに林下の卑湿の地に多くあるものなり

左氏荘三十三年神降于莘以其物享焉杜元凱注據月令甲乙日祭先脾玉用蒼服上青案甲乙於時爲春其色青故用蒼玉青服據素問及五行大義肝屬春其色青自當用肝而今却用脾與素問不同意脾肝附近而體用亦相同故可互相通戴元禮證治要訣飲食入咽而先入肝亦此意

封建の字ハ左傳僖二十四年に見えたり
者の字法多し和訓にこれをてハまた
と讀む連上讀にならぬやうに讀しめざるなり
經傳の中に連下讀の者の字此心にてよむ無し
後漢書蔡邕傳に邕董卓が名に應ぜざりしを
怒りて我力能族人蔡邕終偃蹇者不旋踵矣と
いひしていまだそのこゝろよくきこゆるなり余嘗て奈佐
隅東氏にかたりしによく肯ひたりき又左傳僖二十
三年所不與舅氏同心者有如白水とこれもてい
まだしとよみてよし孔左僖二十五年疏なく上讀

下讀とさかり有陸同
古文孝經應感章に父母を天地に比し長幼を上
下に比して明王の教とし給へるといふ故雖天
子必有尊也句これ總論にて上の明王をうくる
結義にて下の句乃發端なり言有父也必有先
也句言有兄也必有長也句これにて明なり今
人讀法あしく衍句あるやうに心得たり注意をも
とより其通ぜずよし又有尊一句上の天地のこと
いふ無けれども上の説にて孔傳に拘ひてよし史記
淮南厲王傳に為劉氏祭酒應劭注禮飲酒必祭

示有先也故稱祭酒尊也これも先の字宗廟を
見せたり孝經に本つきたり孔傳と同意なり先の
字祖先の先なり孔傳應説も通なりこれをよみ
たがへて先の字を兄へかけてみるゆへ下の四字
剰りてきこゆるなり兄に先といへるは俗習により
てとり違ふ又上にも天地に父母事と見えたれは
有尊也の一句總論にして父母天地とかけてよむ
て見るべし

日光山にて二社權現といふは　東照宮并天海
僧正摩多羅神なり摩多羅神は藤堂高虎を

祭るといふ

武州葛飾郡の村里にて夏月艾草忍冬蓼乃
三種をとりて等分にして水煎して茶に
かへて服す味甘涼にして極めてよし且湿を
去り暑を消し腹を調ふ予多摩郡の教
授たりし時これを門人岡正禮にをしへて其奴僕
ともに服さしむ夏月種秧の比五月雨降つゞきて
田切畢るころ多く瘧疾を病むこれを服すれは
その患ひなし二種にても生にてかりて直に
煎じて宜し

右銅屏一座藤堂和泉侯滌井の茶莊にあり皇
姥茶店として偶人乃老姥の像を置けり茶店の
旅の芝野乃うちにおく其先侯高虎文禄の
役に朝鮮國より俘来せりものといふ
竹棚百貨肆の圖棚上に縹緲をかけ異禽を籠
に入まそかけ連ね其あいだに假面杀帛書
巻筆墨火珠葫蘆文貝茶卓靴韈の類まで器
玩数百種とりそろへ次籠に牡丹荼蘼を
挿みを掛ね金碧精巧妙入毫毛の盡跡なり
上野大慈院の蔵なりしを今装工此舗にて一

覩べし
奥州會津領のうちに大鹽村といふ處あり山間の
川傍に爺が井婆が井とて二つの井あり其井
水を汲て煮ときは焼塩となれり其鹽潔白にて
しかも味よし二井爺が井は淺く婆が井は
濃なり長左衞門といふ百姓其井の主なり其家は
祖の爲に僧空海呪書しておきたまひといひつたふ
空海の像と并に爺婆が二像ありこれ王右軍帖に
いはゆる蜀の鹽井なり大鹽村をよぶにひとし澤
ともなふ所に出るといふ

伊賀國屏風山は絶頂屏風岩といふありて其上に
寒蘭を生ず先年大坂の花肆尋ね來りて多く
掘得たりといふ其所の名をこゝにしるしたりとて石家
敬話も又伊賀山中に一草ありて求めて入ぬれば
金色の光を生ぜしこともあり花肆に得らると同人
の話なり

近聞雜錄

跋

不朽者。不啻人有之。物亦有之。周鼎商彝古矣。其埋沒而在奥渫者。若百年若千年。竟不得不升華堂甲乙之帳矣。亦豈瑰奇之物。自有造物之呵護邪。非邪。篁墩先生首唱考据之學。以率後進。旁以鑒識博通稱。距今數十年。其人既騎箕尾。而今稱好事者流。盖由先生早啟歩徑而進焉。夫然後物之瑰古者。漸然而出。無復寶氣之衝斗牛矣。先生能疏物之蔚滯。俾之不朽。則似後世宜一瓣香以祝先生焉。雖然。武帝帳中。多薄偽者。宣和御府。真

贋襍糅。乃是贋董姦佻。亦由先生之學之行而進焉。是先生祀典。所以不免駁議也。第如其所著書。可以傳世。而頃其近聞寓筆刻方成。因披讀之。異聞錯出。記載詳雅。所謂滿目珠璣。配之宋元諸家隨筆。似不甚遜。嗟寸士也哉。夫先生死既數十年。而此書始出。蓋先生昔能使物不朽。而今天使人能不朽其書。好還之理。固然也。余喜此書之行。因錄所曾臆。以爲跋。文政丙戌龍華會前一日。

它山處士公愷。書於稚松街之老柳深處。

近聞寓筆跋 琴臺

夫循誦習傳之輩。貪多務得。巨細不捐。研尋兀兀。以夜繼晷。一聞先進之士有陶練名實勤成一家言者。追慕之餘。歆挹風猷。輒俛焉而歎。所憾不獲生與之同其時世。聽其緒言。覩其品行。而先進之士。神韻所存。幸有遺編傳於世。僅得一書。披諸几案之上。恰若晤言一室。輸寫欽誠。而後百歲之下。其扶持特立之功。鼓舞作興之術。可得而知也耳。豈啻百歲千萬歲之下。亦復爾爾。意者昇平二百有餘年。奎辟宣化。蘊隆欝積。人文之盛。豈無有嫁美於先進之士者哉。豈

又無有逬邁之士。乘時挺生。能創古人所未曾有者哉。而彼輕脫粗豪之人。以爲今人也。概而忽焉。此其人縱使生與之同其時世。聽其緒言。覩其品行。冥頑無知。漠然不相省。以終身焉已矣。嗚乎。識人之難。自昔然矣。篁墩先生。名漢官。字學儒。一字學生。篁墩其號。其先常陸人。家世業醫。至篁墩始爲儒。左袒漢魏傳注。首唱考據學於安永天明之間。平生好合古鈔數本。比對校勘四子六經。聞人之儲藏古書。百方求之。必手自寫鈔。故其所考定諸書。尤究精覈。然其資性敦行。沈默不覺。固無意於當世。僻處窮巷。以終身焉。故當世之人。視以爲今人。知其識見者甚稀矣。其所著述。總若干種。特論語集解攷異。經籍考二書。考證明徵。持論詳密。蓋我邦人所未曾有。而皆爲有識者所稱。近世之人。爭捜索珍編奇冊。知崇奉唐宋古鈔影本者。實篁墩爲之嚆矢云。頃書肆慶元堂刻近聞寓筆四卷。近聳襍錄一卷。余得讀之。其所載多經史肯綮。及士林逸事。其寓筆簡而核。其用意雋而永。撰輯宏博。品隲相當。其大者實有裨於經義。又有功於名教。其小者足以闡發後學之才鋒。參綜藝園之談柄。篁墩歿後三十年于今。其遺編孤行于世。人覺

購求之。僅讀一書。則蹶角稽首乎其學術之富贍。與識見之明暢。古人有謂曰。馬遷生而史記未振揚雄歿而法言大興。誠哉夫後之視今。猶今之視古也。自今以往。冥頑無知。不相省。將以終身者。一讀斯書。不憾不獲生與之同其時世。加旃明瞭粤稽晰辯較詳。以脩一代人文之盛。則知其首唱考據之功。不可為泯泯也哉。文政九年丙戌之肇夏。

信濃東條耕子蔵撰

文政六癸未八月官許

吉田坦蔵著

東都書林

浅草新寺町　和泉屋庄次郎

横山町三丁目　和泉屋金右衛門

国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan